

第3節 棚倉城跡の本質的価値と構成要素

『国指定史跡棚倉城跡保存活用計画書』においては、棚倉城跡の本質的価値は以下のとおりまとめられている。

1 棚倉城跡の本質的価値

(1) 親藩譜代大名が治める棚倉藩の城

棚倉城を築城したのは丹羽長重(1571-1637)である。父の丹羽長秀(1535-1585)は織田信長に仕え、姉川の戦い、本願寺の一揆平定などに功があり、安土城築城の総奉行を務め、本能寺の変では豊臣秀吉とともに明智光秀を打倒し、柴田勝家を打倒した後は、越前北庄城主として、120万石を領した武将である。長秀の死後、北庄城主になったのが子の長重であるが、次第に領地を減らし、関ヶ原合戦では西軍に組みし改易となるが、慶長8年(1603)に常陸古渡藩で大名に復帰し、お伽衆として徳川秀忠に仕え、元和5年(1619)に常陸江戸崎藩、元和8年(1622)に棚倉藩に移封され、寛永2年(1625)に棚倉城を築城し、寛永4年(1627)棚倉藩から白河藩へ移封、子の丹羽光重の代に寛永20年(1643)白河藩から二本松藩へ移封されている。棚倉藩は水戸街道から入る東北の玄関口に位置し、常陸国から陸奥国へに入る浜街道に位置する平潟港(北茨城市)を領していた。

丹羽氏移封後、内藤氏、太田氏、松平氏等の親藩譜代大名が入封するが、会津藩、白河藩、二本松藩、平藩とともに奥州の統治政策上の重要な土地であることは変わらなかった。その重要性が再認識されるのが、戊辰戦争の時である。奥羽越列藩同盟軍と会津藩を攻撃目標とする新政府軍は、奥州街道の拠点である小峰(白河)城を攻略すると次の攻撃目標を棚倉城に定め、板垣退助を参謀として軍を進めたことである。新政府軍にとって会津藩攻撃の前に水戸街道の要衝である棚倉城を攻略しておく必要があったのである。

(2) 寛永期の築城形態を理解する上で貴重

棚倉城の最大の特徴は、深い堀と大土塁に囲まれた長方形単郭の本丸跡と、その土塁上にある二重の隅櫓と、それを繋いで全周する長大な多門櫓にある。多門櫓と隅櫓の調査では、極めて良好な状態で礎石を確認することができた。遺構面では火災の痕跡も確認でき、礎石も被熱が見られることから、戊辰戦争時の火災により、焼失したことも裏付けられた。その本丸跡の北と南では高麗門と櫓門を備えた大形の枳形がそれぞれ単独であったことが推定され、本丸跡の御殿空間の広さを勘案すると、寛永期(1624～1645)の縄張りや築城形態をよく伝えていると評価できる。

また、記録や発掘調査の成果では、明確な改修の痕跡が確認できないこともその傍証となる。

二ノ丸西面に残る石垣は、自然石主体の布積み崩しとされ、文禄・慶長初期(1593～1610)の織豊系城郭にみられる古式の様相を持つ点が特徴とされ、それは丹羽家が持っていた伝統的な石垣の知と地域の石材環境に適応した技術の選択による結果

と評価されている

(3) 町民の心性に欠かすことの出来ない場所

棚倉城は古代から連綿と続く地域の特性（政治・交通・宗教）と、歴史の上に築城された。町民は、棚倉城跡を親しみを込めて「ごほんじょう」と呼んでいる。町民にとって城とは棚倉城のことであり、正に「御本城」なのである。

追手門跡付近には近代以降、東白川郡役所や営林署などの行政機関の建物が建てられ、本丸跡には東白川郡立農蚕学校が建てられるなど、引き続き行政の中心として利用されてきた。その後、本丸跡では昭和 30 年（1955）代まで棚倉競輪や小学校の運動会の会場として利用されるなど、町民にとってかけがえのない場所であり、憩いの場でもあった

2 構成要素の特定

(1) 城郭構造（縄張り）

現在の城郭構造は、江戸初期の「正保城絵図」と明治期の絵図との比較から、寛永 4 年（1627）以来の築城当初の形を保っていると推測される。構造は輪郭式であり、現存する巨大な土塁と最大幅 60 m を測る堀で区画される本丸を配し、それを取り巻くように南北に長方形の二ノ丸が展開する。また、その北西に三ノ丸（林曲輪）が設けられている。本丸跡で行った土質調査（ボーリング調査）の結果によれば、本丸には旧表土に約 3 m 程度の盛土がなされ、そのうえで土塁などの造成が行われていることが判明している。基本的には土の城であるが、二ノ丸西面の崖部には約 160 m にわたって石垣が築かれており、並行する江戸道（白河・黒羽方面）から見ると、あたかも石垣の城と思わせる景観となっている。縄張りや内柵形や折れを多用するなど防御性に力を入れていることが特徴で、元和偃武後の築城思想を形にした典型的な例として貴重であるとも指摘されている。

(2) 堀・土塁・虎口・石垣

ア 堀

絵図によると棚倉城の堀は基本的には水堀で、三ノ丸の一部に空堀の記載がある。本丸堀の残存状況は比較的良好である。「正保城絵図」によれば本丸堀の幅は北辺最大幅 34 間（約 61 m）、南辺最大幅 35 間（約 63 m）とされている。二ノ丸堀は、埋め立て等で消滅しているが、昭和 30 年（1955）頃までは水田として利用されていた箇所もあり、宅地化に伴う開発で徐々に消滅したと考えられる。平成 11 年（1999）の調査で、城の東側で堀幅が約 18 m と確認されている。堀の深さについては、現地表から約 2.8 m まで掘り下げたが堀底までは確認出来なかった。

イ 土塁

本丸土塁については、本丸平場側から高さ約 6 m、上幅は約 7 m（基底部）を測り、四方の隅櫓の位置は約 12 m 程度の平場が形成されている。二ノ丸に関しては、「正保城絵図」によれば土塁が巡り、3 箇所には櫓形が見え、L 字形の部土居が描かれている。二ノ丸土塁は三ノ丸に近い箇所で約 50 m が残存するが、それ以外は消滅している。本丸は二ノ丸や三ノ丸より高く、防衛上の配慮が働いていたと考えられる。二ノ丸については旧地表の高いところに合わせるように平坦化が行われ、場所によっては 1 m 以上の盛土も確認されている。

ウ 虎口

本丸虎口は南北に 2 カ所存在し、どちらも櫓形虎口である。現在は 2 カ所ともに櫓形を構成する土塁が崩され、改変されているが、北側虎口には北二門の礎石が残されている。二ノ丸虎口は、城下へと続く東側の追手門、南側の南門、北側の北一門の 3 カ所の他、三ノ丸と隣接する搦手門、西側城外へと続く埋門の 2 カ所が確認出来る。

エ 石垣

棚倉城は基本的に土の城であるが、二ノ丸西面の崖部には約 160 m にわたって石垣が構築されている。平成 26 年（2014）の調査で、石垣の保存及び技術的特徴を把握するために、地表面で確認出来る全ての石材（約 2,100 個）に対し、加工痕や材質などを特定するカルテ作成を行った。これまでは円礫の野面石による乱積み傾向の石垣と思われてきたが、調査の結果、棚倉城の石垣は天正～慶長期の古式の特徴を残しながらも、元和～寛永期の平面性の高い石垣を志向していることが判明した。

（3）建造物

ア 南門

棚倉城内の建造物のうちで現存しているものは、宝永 4 年（1707）に藩主の太田資晴により町内の長久寺に移築された南門のみである。

イ 御殿

本丸には築城時から御殿が設けられていたが、その後に建て替えがあったか不明である。慶応 3 年（1867）の「棚倉城請取渡当日御着座之間并出役之図」により、幕末期の建物配置が復元できる。御殿は基本的に平屋で、屋根は松皮ぶき、壁は荒土であったと考えられる。

ウ 櫓

天守は無く、本丸土塁上に二重の隅櫓が 4 棟、一重の櫓が 1 棟設けられていた。これらの櫓は櫓門と多門櫓により隙間なく連結しており、その総延長は 204 間（約 367 m）と東北随一の規模を誇る。平成 28 年（2016）3 月の第 VI 次発掘調査では、

多門櫓の礎石列が発見され、同年 8 月の第Ⅶ次発掘調査では、新たに隅櫓の礎石も発見された。

エ 追手門

平成 17 年（2005）の消防屯所建設に伴う発掘調査で、追手門の礎石が 6 基発見された。礎石に用いられている石材は通称白河石と呼ばれる溶結凝灰岩であり、配置から脇戸と脇塀を持つ高麗門であったと想定される。

（４）出土遺物

現在までの調査によって得られた情報は少ないが、主な出土遺物として近世陶磁器が挙げられる。その中でも特に二ノ丸堀の調査の際に得られた破片資料が主であり、まとまった量が得られているのは 18 世紀後半以降の資料である。それ以前のものとしては、16 世紀～17 世紀代の志野の菊皿・外面青磁釉高台内無釉磁器碗（肥前Ⅱ - 2 期）、瀬戸美濃の天目碗、色絵磁器碗や、岸窯産播鉢などが確認されている。また、17 世紀末～18 世紀初頭では、肥前の磁器碗皿・京焼写し・呉器手腕・唐津三島手鉢などが見られる。

18 世紀後半以降の遺物に関しては量的に増大し、特に陶器においては、碗皿は相馬焼、播鉢・甕は会津本郷焼という使い分けが指摘されている。城主の移り変わりの激しさから推定される前任地から持ち込まれる外来の要素は出土遺物からは認められず、肥前産磁器と在地の陶器（相馬焼・会津本郷焼）が主体的であり、小峰城、三春城などの周辺城館から出土する陶磁器と同様の傾向が見られる。

（５）城下

二ノ丸・三ノ丸（林曲輪）を囲む外堀の、さらに外側に城下が設定されている。城下を囲む惣構は存在しないが、城下そのものが棚倉城のある台地南端部のほぼ全域を占地し、その意味では東・西・南 3 方向を、崖と河川を天然の防御として利用したと考えられる。

棚倉城下は、現在の字北町・南町を武家地、字古町・新町・鉄砲町・鷹匠町を町人地とする町割りがなされている。城下整備は、丹羽長重による築城と同時に伝わると伝わり、正保年間の「正保城絵図」、江戸中期頃の「棚倉国棚倉城下町絵図」、幕末期の「慶応二年奥州棚倉之図」と、年代を経ても基本的には同様の区割りで推移している。

第 4 節 本質的価値を構成する要素

『国指定史跡棚倉城跡保存活用計画書』にまとめられた、棚倉城跡の本質的価値を構成する諸要素を以下に示す。

1 史跡指定地内

(1) 本質的価値を構成する要素

- ア 棚倉城跡の縄張りや構造を示す曲輪、門跡、堀、土塁、虎口
- イ 棚倉城跡を象徴する遺構である石垣
- ウ 棚倉城跡の地下遺構・遺物

(2) 本質的価値を構成する要素以外の諸要素

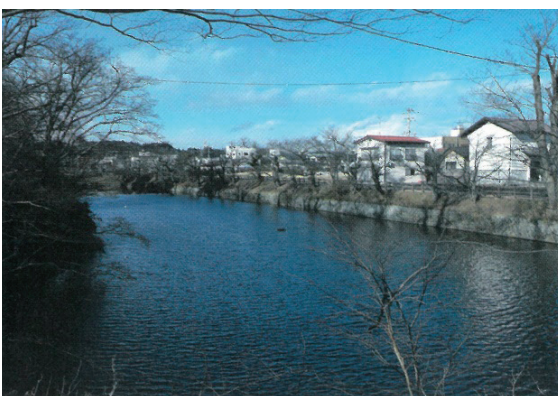
- ア 史跡の保存・活用に必要な諸要素
 - ・遺構表示施設
 - ・案内板
 - ・トイレ、四阿等の便益施設
 - ・公園施設（柵、塀、街灯、側溝、埋設管、電信柱等）
 - ・防災・防犯施設（転落防止柵、消火栓等）
 - ・植栽木（サクラ、ケヤキ、ツツジ等）
- イ その他の要素
 - ・中世の板碑
 - ・顕彰碑
 - ・現存建築物（住宅、倉庫等）
 - ・樹木



曲輪（本丸）



追手門跡



内堀



土塁（本丸）



虎口（本丸南口）



二ノ丸石垣



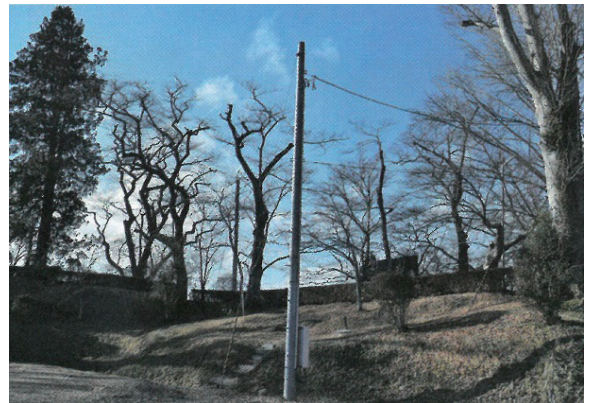
棚倉中学校と二ノ丸石垣



柵



案内板（棚倉城跡）



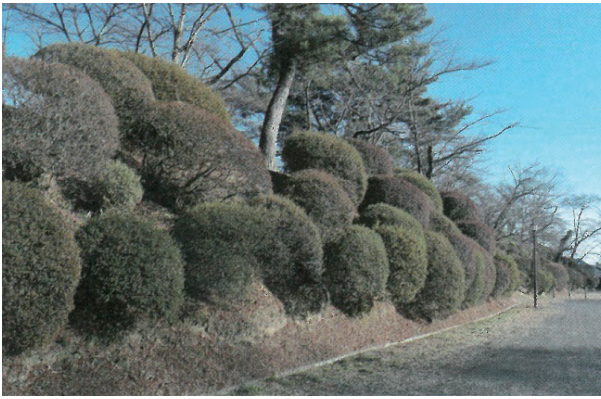
電信柱



街灯



棚倉町茶室



植栽木（ツツジ）

2 史跡指定地外

（1）本質的価値を構成する要素

- ・ 棚倉城跡の縄張りや構造を示す曲輪、堀、土塁
- ・ 曲輪の利用形態を示す地下遺構
- ・ 県指定天然記念物「棚倉城跡の大ケヤキ」
- ・ 長久寺山門（旧棚倉城南門）

（2）本質的価値を構成する要素以外の諸要素

ア 史跡の保存・活用に応じた諸要素

- ・ 遺構解説板

イ その他の諸要素

- ・ 神社社殿、公共施設等
- ・ 顕彰碑等
- ・ 通勤路・通学路として利用されている道路
- ・ 樹木



棚倉城跡の大ケヤキ



長久寺山門



棚倉町子どもセンター



通勤路・通学路

2 棚倉城跡の周辺にあり、棚倉城跡に関連する文化財

- ・都々古別神社（馬場）本殿（国指定重要文化財）
- ・南御殿跡（南茶屋）
- ・門叶家住宅（武家屋敷）
- ・蓮家寺山門（町指定有形文化財）



都々古別神社（馬場）本殿（国指定重要文化財）



門叶家住宅（武家屋敷）



蓮家寺山門（町指定有形文化財）

第5節 史跡指定地の状況

1 史跡へのアクセス

史跡棚倉城跡へのアクセスは、公共交通機関等による場合は、JR 磐城棚倉駅、JR バス 白棚線の郵便局前バス停、福島交道路線バスの古町一丁目バス停から徒歩で訪れることになる。バスの運行本数は、1 日に最大 5 本程度と少ない。

自家用自動車等を利用する場合には、国道 118 号・国道 289 号から主要地方道黒磯・棚倉線を利用したアクセスが想定される。現状では、公共交通機関よりも自家用車によるアクセスの利便性が高く、北駐車場と南駐車場が設けられている。国道 118 号・国道 289 号、主要地方道黒磯・棚倉線から案内表示がされている。



第 36 図 棚倉城跡へのアクセス図

2 植生

棚倉城跡の植生は、サクラ、カエデ、ケヤキ、コナラ、アカマツ、ツゲ、エゴノキ、ウメ、クロマツ、ヌルデ、サワラ、カシ、コウヤマキ、ツバキ等が生育するが、大半が植栽されたものである。

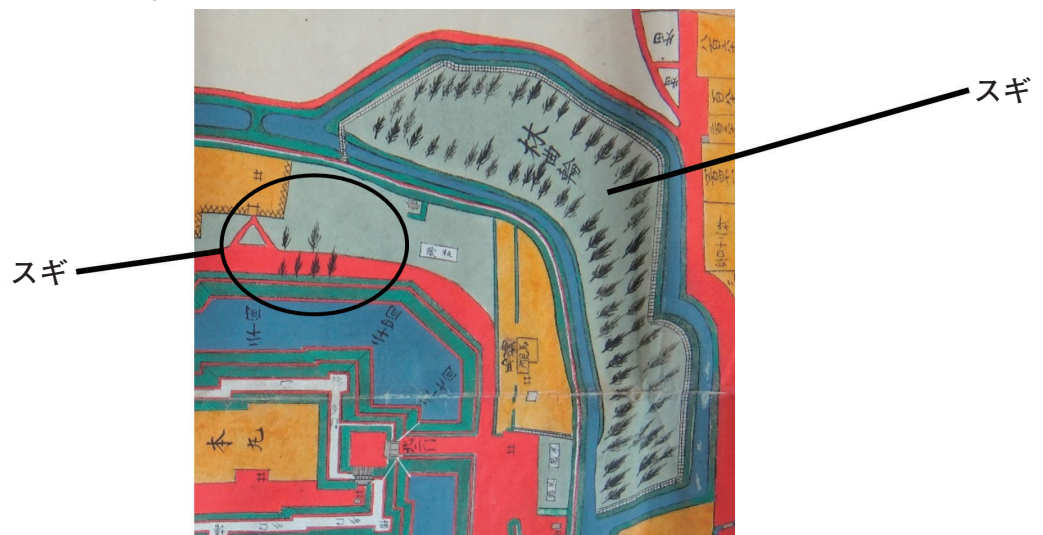
(1) 各時代の植生と管理

藩政時代

正保年間（1644-1648）に棚倉藩が幕府に提出した「奥州棚倉城之図」では、二ノ丸の北側と西側に松が描かれ、三ノ丸はマツ林のように描かれている。「奥州棚倉城図」を見ると、二ノ丸には外堀沿いに等間隔でスギらしき樹木が植えられているように記載され、三ノ丸（林曲輪）には、曲輪全体にスギ、マツらしき樹木が混在している様子が描かれている。両絵図ともに棚倉城跡の大ケヤキは描かれていない。『ふるさとの絵図』（史料編第六号）に所載の江戸末期とされる「棚倉場内絵図」を見ると、二ノ丸はスギによって覆われているように描かれている。

また、享和3年（1803）に、長岡藩士が東北地方を探索した経緯を記した日記「陸奥の編笠」中にある棚倉城下と棚倉城についての記述の中で「城内に松なく大木の杉斗也」とある。「慶応二年奥州棚倉之図」（1866）では、二ノ丸の西側に数本のスギらしき樹木と、三ノ丸（林曲輪）はスギ林として描かれている。

絵図から見た二ノ丸の三ノ丸の樹木は、絵図の年代から変遷を見ると、マツからスギに変化したと読み取ることが出来そうである。二ノ丸のスギは幕末には少なくなっていたようであるが、三ノ丸は別名が林曲輪と呼ばれたように樹木が生い茂る曲輪であったようである。



「慶応二年奥州棚倉之図」部分

藩政時代の植生管理に関する記述としては、「宝暦十二年十月町政諸事覚書」（『棚倉町史』第三巻）に棚倉城の土塁を含めた各施設の草刈りについて、古町と新町に対して課役を行っている。割り当てられた人数は168人とする記録がある。

また、『松平周防守慶応元年分限帳』（光西寺松井家文書「分限帳上・下」）には、「城

内外掃除方」と書かれた役職があり、植生の管理にも関係しているものと思われる。

明治維新後

町内桧木地区には、「棚倉城の巨木を払い下げてもらい桧木川に橋を架けた」と言い伝えがある。また、「慶応二年奥州棚倉之図」に棚倉藩について記述した貼紙があり、その中に「近津城ノ（二）丸岡田竹右エ門屋敷内ニ大ナル槻木アリ是ハ丹羽公築城前近津神社ノ神木ナリト土俗申傳ル木ノ丸サ二十間根元ヨリ四間程ハ洞ニナリ内八疊敷アリ枝ハ東ノ方長ク■間位延ヒ木ノ高サ二十間明治三年維新後伐木シ幹枝トモニジョレンモリニテ東京へ賣拂ヒ大ニ利益アリト云ナル千年以上経タル」とあり、廃城後の明治3年（1870）に城内の岡田竹右エ門の屋敷にあったケヤキの巨木を売却したことを伝えている。岡田竹右エ門は松平周防守慶応元年分限帳によると俸禄三千石の家老「岡田竹右衛門」であり、棚倉藩時代には城内（二ノ丸南門付近）に屋敷を与えられている。

明治3年（1870）の売り払いについての記録や桧木地区の言い伝えを考えあわせると、戊辰戦争後から廃藩置県までの間に棚倉藩によって城内樹木の整理が行われたことが推察される。



明治20年（1887）代



大正時代（1912～1926）

近代

明治30年（1897）代後半に地元の青年たちによってサクラの植栽が行われた。この植栽は日清戦争の戦勝記念としてソメイヨシノが植えられたものと伝えられ、その後も、記念植樹が続けられ、現在では約270本のサクラがあり4月上旬から中旬にかけて、多くの花見客が訪れている。

隅櫓跡の4カ所にはドイツトウヒ、サワラなどが植栽されているが、隅櫓の目印的に植栽されたものであろうか。

実生により生育したものとして、本丸土塁内側にあるケヤキ（幹回り525cm、樹高26m）などがある。

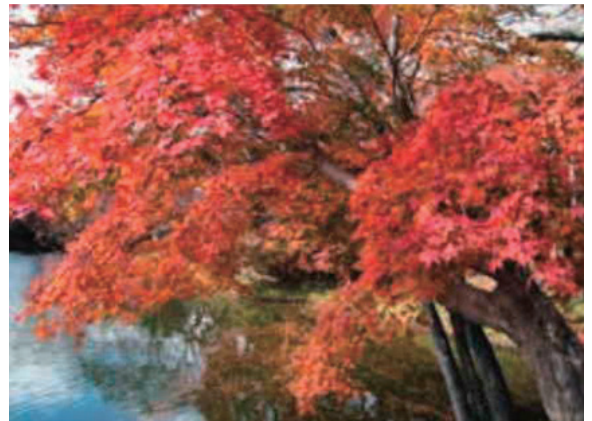
本丸土塁、二ノ丸西面石垣の土塁に植栽されているツツジは、昭和40年（1965）代に個人の寄附によって植栽されたものである。二ノ丸西面石垣の土塁は棚倉中学校に隣接していることから、長年にわたり棚倉中学校生徒及びPTAによって除草が行われて来たが、東日本大震災以後は町が定期的な除草と管理を行っている。

本丸及び本丸堀は、昭和23年（1948）に、県立自然公園（奥久慈県立自然公園）

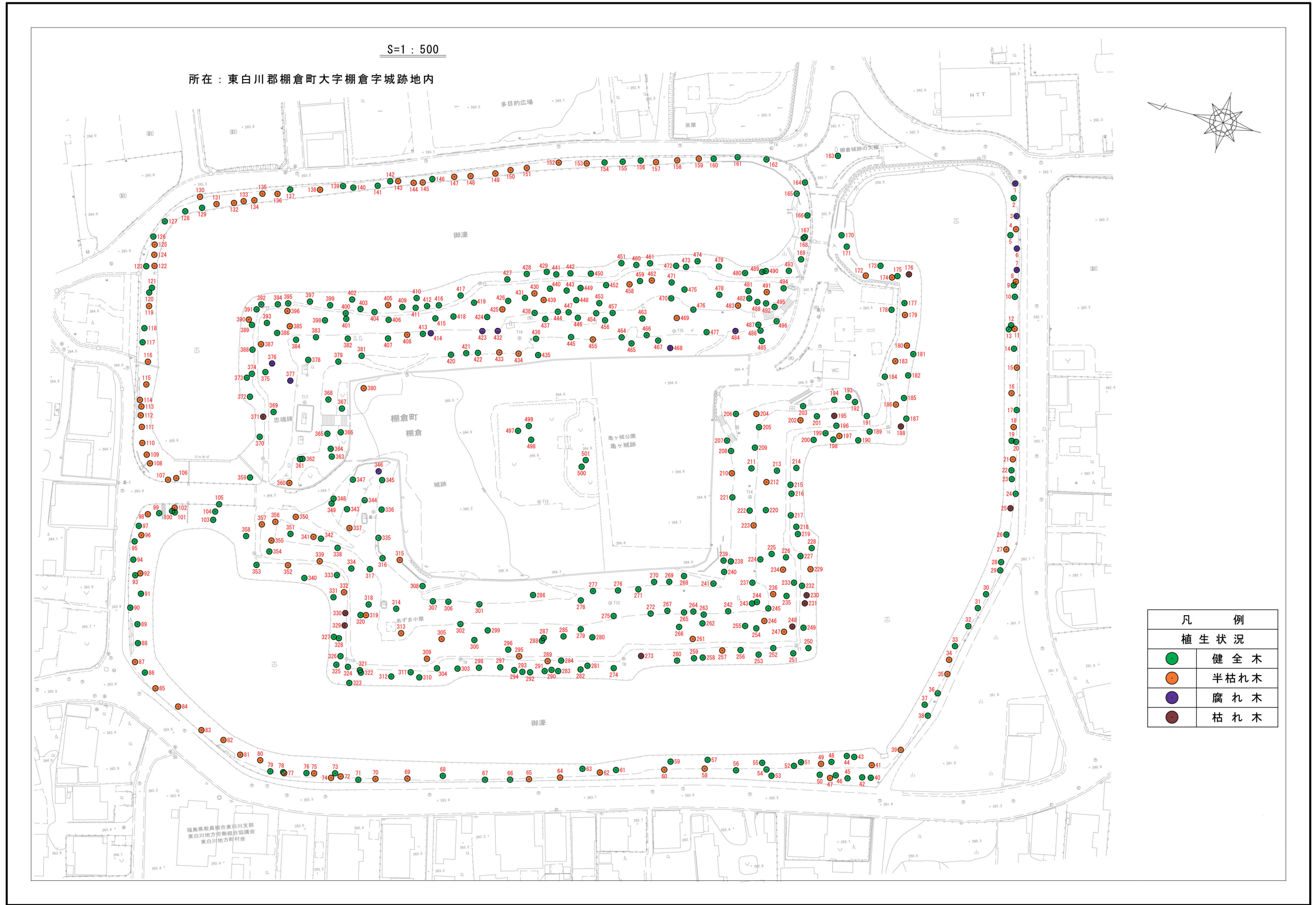
の一部（棚倉城跡地区）として指定されている。

（２）樹木調査

棚倉城が国史跡となった翌年の令和２年（2020）３月に、棚倉城跡の本丸内と本丸堀周辺の樹木調査を実施した。調査は、区域内の種々及び幹回・樹高、枯れ・腐朽などの状況を診断した。調査を実施した範囲では、501本を記録した。平均樹高が9.2m、幹回りが123cmであった。また、調査木の約2.1%の11本が枯れ、約25.1%の126本が半枯れ、約2.3%の12本が腐朽と判定された。これらを合わせると全体の約30%（149本）が倒木、枝折れ等の危険性が高い状態にある結果となった。健全と判定された調査木は352本であった。草本類の調査は実施していないが、ニホンタンポポやショウジョウバカマ等が確認されている。



上空から見た棚倉城跡の植生



第 37 図 棚倉城跡樹木現況図

樹木調査一覧表

番号	樹 種	幹回 (cm)	樹高 (m)	備 考	番号	樹 種	幹回 (cm)	樹高 (m)	備 考	番号	樹 種	幹回 (cm)	樹高 (m)	備 考	番号	樹 種	幹回 (cm)	樹高 (m)	備 考
1	ソメイヨシノ	143	8	腐れ	101	ソメイヨシノ	50	6		201	アカマツ	147	11		301	ソメイヨシノ	182	13	
2	イロハカエデ	118	9		102	ソメイヨシノ	119	5	半枯れ	202	ソメイヨシノ	190	13	半枯れ	302	イロハカエデ	132	9	
3	ソメイヨシノ	204	10	腐れ	103	ケヤキ	310	19		203	イロハカエデ	187	9		303	イロハカエデ	64	6	
4	ソメイヨシノ	219	6	半枯れ	104	イロハカエデ	87	9		204	ソメイヨシノ	260	8	半枯れ	304	イロハカエデ	56	5	
5	ケヤキ	44	6		105	クロマツ	165	23		205	ソメイヨシノ	111	8		305	ソメイヨシノ	203	13	半枯れ
6	ソメイヨシノ	75	6	腐れ	106	ソメイヨシノ	175	12	半枯れ	206	シダレザクラ	132	8		306	ソメイヨシノ	52	9	
7	ソメイヨシノ	53	5	腐れ	107	シダレザクラ	166	13	半枯れ	207	ソメイヨシノ	130	11		307	ソメイヨシノ	55	7	
8	ソメイヨシノ	77	5	半枯れ	108	ソメイヨシノ	70	6	半枯れ	208	ソメイヨシノ	65	7		308	ソメイヨシノ	186	12	
9	イロハカエデ	47	6		109	ソメイヨシノ	84	7	半枯れ	209	ソメイヨシノ	94	8		309	ソメイヨシノ	220	15	半枯れ
10	イロハカエデ	118	7		110	ソメイヨシノ	130	7	半枯れ	210	ソメイヨシノ	330	8	半枯れ	310	イヌザクラ	158	14	
11	ソメイヨシノ	162	5	半枯れ	111	ソメイヨシノ	72	7	半枯れ	211	シダレザクラ	55	6		311	イロハカエデ	52	7	
12	イロハカエデ	43	5		112	シダレザクラ	170	7	半枯れ	212	ソメイヨシノ	160	10	半枯れ	312	ケヤキ	160	16	
13	イロハカエデ	78	5		113	シダレザクラ	150	8	半枯れ	213	ソメイヨシノ	57	7		313	ソメイヨシノ	150	7	半枯れ
14	イロハカエデ	96	7		114	ソメイヨシノ	160	6	半枯れ	214	ソメイヨシノ	206	14		314	サウラ	309	25	
15	ソメイヨシノ	156	5	半枯れ	115	ソメイヨシノ	210	7	半枯れ	215	イロハカエデ	103	13		315	ソメイヨシノ	40	4	半枯れ
16	ソメイヨシノ	151	5	半枯れ	116	シダレザクラ	200	11	半枯れ	216	イロハカエデ	101	13		316	ソメイヨシノ	212	13	
17	ソメイヨシノ	76	5		117	イロハカエデ	57	5		217	イロハカエデ	171	14		317	ソメイヨシノ	70	7	
18	ソメイヨシノ	153	5	半枯れ	118	シダレザクラ	38	4		218	ソメイヨシノ	190	14		318	ソメイヨシノ	295	15	
19	ケヤキ	42	6		119	ソメイヨシノ	115	7	半枯れ	219	イロハカエデ	77	11		319	ソメイヨシノ	215	14	半枯れ
20	ソメイヨシノ	92	8		120	イロハカエデ	58	6		220	ソメイヨシノ	42	6		320	ソメイヨシノ	42	6	
21	ソメイヨシノ	290	12	半枯れ	121	ヌルデ	70	6		221	ソメイヨシノ	93	7		321	ソメイヨシノ	110	11	
22	イロハカエデ	25	3		122	ソメイヨシノ	105	8	半枯れ	222	シダレザクラ	41	6		322	イロハカエデ	30	4	
23	ソメイヨシノ	144	10		123	ソメイヨシノ	166	9		223	ソメイヨシノ	170	8	半枯れ	323	コナラ	92	13	
24	ソメイヨシノ	75	9		124	ソメイヨシノ	74	6	半枯れ	224	ソメイヨシノ	221	15		324	イロハカエデ	40	4	
25	ソメイヨシノ	94	8	枯れ	125	ソメイヨシノ	88	5	半枯れ	225	ソメイヨシノ	168	14		325	イロハカエデ	123	10	
26	ソメイヨシノ	45	6		126	ソメイヨシノ	60	5		226	イロハカエデ	30	6		326	イロハカエデ	66	6	
27	ソメイヨシノ	203	13	半枯れ	127	ソメイヨシノ	60	5		227	イロハカエデ	173	12		327	イロハカエデ	50	5	
28	ケヤキ	22	4		128	ソメイヨシノ	60	6		228	イロハカエデ	73	7		328	イロハカエデ	129	10	
29	ソメイヨシノ	62	6		129	ケヤキ	32	5		229	ソメイヨシノ	127	8	半枯れ	329	ソメイヨシノ	48	9	枯れ
30	シダレザクラ	248	15		130	ソメイヨシノ	195	7	半枯れ	230	ソメイヨシノ	130	8	枯れ	330	ソメイヨシノ	51	7	枯れ
31	イロハカエデ	67	6		131	ソメイヨシノ	102	5	半枯れ	231	ソメイヨシノ	155	10	枯れ	331	イロハカエデ	151	8	
32	ケヤキ	31	4		132	ソメイヨシノ	105	5	半枯れ	232	イロハカエデ	51	5		332	ソメイヨシノ	55	8	半枯れ
33	ケヤキ	295	17		133	ソメイヨシノ	90	6	半枯れ	233	ソメイヨシノ	120	11		333	イロハカエデ	46	4	
34	ソメイヨシノ	247	14	半枯れ	134	ソメイヨシノ	103	7	半枯れ	234	シダレザクラ	121	11	半枯れ	334	ソメイヨシノ	33	6	
35	ソメイヨシノ	55	5	半枯れ	135	ソメイヨシノ	122	10	半枯れ	235	ソメイヨシノ	141	12		335	ソメイヨシノ	187	10	
36	シダレザクラ	32	4		136	ソメイヨシノ	113	5	半枯れ	236	ソメイヨシノ	198	10	半枯れ	336	ソメイヨシノ	42	5	
37	ケヤキ	145	15		137	ソメイヨシノ	58	5		237	ソメイヨシノ	85	8		337	ソメイヨシノ	132	13	半枯れ
38	イロハカエデ	155	12		138	イロハカエデ	70	5	半枯れ	238	ソメイヨシノ	76	7		338	イロハカエデ	158	9	
39	ソメイヨシノ	280	14	半枯れ	139	イロハカエデ	60	5		239	ケヤキ	78	8		339	ソメイヨシノ	62	8	半枯れ
40	ソメイヨシノ	99	8		140	ソメイヨシノ	198	8		240	イロハカエデ	80	8		340	イロハカエデ	46	6	
41	ソメイヨシノ	246	10	半枯れ	141	ソメイヨシノ	142	7		241	イロハカエデ	110	7		341	ソメイヨシノ	251	16	半枯れ
42	ソメイヨシノ	126	10		142	イロハカエデ	48	4		242	ソメイヨシノ	93	7		342	イロハカエデ	72	7	
43	イロハカエデ	46	5		143	ソメイヨシノ	50	4	半枯れ	243	ソメイヨシノ	53	6		343	エゴノキ	61	8	
44	ケヤキ	285	18		144	シダレザクラ	123	6	半枯れ	244	ソメイヨシノ	75	7		344	イロハカエデ	156	6	
45	ソメイヨシノ	88	10		145	シダレザクラ	175	7	半枯れ	245	ソメイヨシノ	76	8		345	ケヤキ	392	14	
46	イロハカエデ	53	4		146	イロハカエデ	65	5		246	ソメイヨシノ	28	6	半枯れ	346	ソメイヨシノ	200	11	腐れ
47	ソメイヨシノ	71	7	半枯れ	147	ソメイヨシノ	105	6	半枯れ	247	ソメイヨシノ	72	9	半枯れ	347	ケヤキ	142	19	
48	イロハカエデ	70	6		148	ソメイヨシノ	190	8	半枯れ	248	ソメイヨシノ	62	8	枯れ	348	イロハカエデ	73	8	
49	ソメイヨシノ	235	13	半枯れ	149	ソメイヨシノ	165	6	半枯れ	249	イロハカエデ	60	5		349	イチヨウ	270	20	
50	ツゲ	52	3		150	ソメイヨシノ	130	7	半枯れ	250	ケヤキ	243	16		350	ソメイヨシノ	71	11	半枯れ
51	イロハカエデ	31	4		151	ソメイヨシノ	135	6	半枯れ	251	イロハカエデ	80	6		351	イロハカエデ	138	10	
52	イロハカエデ	52	11		152	ソメイヨシノ	180	5	半枯れ	252	イロハカエデ	38	5		352	ソメイヨシノ	178	13	半枯れ
53	アカマツ	182	16		153	ソメイヨシノ	182	6	半枯れ	253	イロハカエデ	68	6		353	コナラ	195	14	
54	アカマツ	172	17		154	ソメイヨシノ	78	6		254	ソメイヨシノ	134	10		354	イロハカエデ	53	6	
55	コナラ	36	4		155	ソメイヨシノ	142	6		255	イロハカエデ	50	5		355	ソメイヨシノ	144	15	半枯れ
56	ソメイヨシノ	118	10		156	ソメイヨシノ	76	6		256	イロハカエデ	47	4		356	ソメイヨシノ	250	14	半枯れ
57	イロハカエデ	70	7		157	ソメイヨシノ	135	6	半枯れ	257	ソメイヨシノ	46	7	半枯れ	357	ソメイヨシノ	152	12	半枯れ
58	ソメイヨシノ	98	7	半枯れ	158	ソメイヨシノ	130	6	半枯れ	258	イロハカエデ	104	14		358	イロハカエデ	90	10	
59	イヌザクラ	103	11		159	ソメイヨシノ	108	6	半枯れ	259	イロハカエデ	127	14		359	ケヤキ	150	16	
60	ソメイヨシノ	168	12	半枯れ	160	ソメイヨシノ	86	6		260	イロハカエデ	103	13		360	ソメイヨシノ	164	5	半枯れ
61	ケヤキ	172	15		161	ケヤキ	300	13		261	イロハカエデ	44	4	半枯れ	361	イロハカエデ	80	9	
62	ソメイヨシノ	210	14	半枯れ	162	ソメイヨシノ	113	8		262	イロハカエデ	75	6		362	ケヤキ	377	13	
63	ケヤキ	105	13		163	ケヤキ	1, 130	18		263	ソメイヨシノ	50	7		363	イロハカエデ	72	7	
64	ソメイヨシノ	159	5	半枯れ	164	ソメイヨシノ	215	11		264	ソメイヨシノ	56	7		364	ケヤキ	213	17	
65	ソメイヨシノ	102	5	半枯れ	165	イロハカエデ	56	5		265	ソメイヨシノ	80	9		365	アカマツ	202	16	
66	ソメイヨシノ	155	7		166	イヌザクラ	52	6		266	ケヤキ	188	15		366	イチヨウ	132	14	
67	ソメイヨシノ	155	8		167	ケヤキ	143	15		267	サウラ	247	23		367	イチヨウ	114	13	
68	ソメイヨシノ	260	9		168	ソメイヨシノ	107	14		268	ソメイヨシノ	118	9		368	ケヤキ	228	17	
69	ソメイヨシノ	290	7	半枯れ	169	ケヤキ	120	15		269	ケヤキ	194	14		369	イロハカエデ	218	15	
70	ソメイヨシノ	198	6	半枯れ	170	ケヤキ	352	19		270	カシ	42	6		370	イロハカエデ	178	12	
71	ソメイヨシノ	87	8		171	ケヤキ	341	21		271	シダレザクラ	40	6		371	ソメイヨシノ	149	15	枯れ
72	ソメイヨシノ	185	7	半枯れ	172	ソメイヨシノ	87	10	半枯れ	272	ソメイヨシノ	163	8		372	コナラ	234	17	
73	ソメイヨシノ	49	6		173	ケヤキ	245	16		273	ソメイヨシノ	41	4	枯れ	373	イロハカエデ	45	7	
74	ソメイヨシノ	161	7	半枯れ	174	イヌザクラ	135	12	半枯れ	274	ソメイヨシノ	64	8		374	ソメイヨシノ	130	11	
75	ソメイヨシノ	101	7	半枯れ	175	イロハカエデ	73	7		275	ソメイヨシノ	65	8		375	イロハカエデ	116	10	
76	ソメイヨシノ	74	7		176	ソメイヨシノ	66	6	枯れ	276	ソメイヨシノ	138	8		376	ソメイヨシノ	140	13	腐れ
77	ソメイヨシノ	105	6	半枯れ	177	ソメイヨシノ	63	6		277	ソメイヨシノ	60	6		377	ソメイヨシノ	170	14	腐れ
78	エゴノキ	35	5		178	イロハカエデ	55	5		278	シダレザクラ	49	7		378	ドイトウヒ	235	24	
79	ソメイヨシノ	155	8		179	ソメイヨシノ	122	7	半枯れ	279	イロハカエデ	86	6		379	ソメイヨシノ	63	7	
80	ソメイヨシノ	122	7	半枯れ	180	ソメイヨシノ	260	11	半枯れ	280	ソメイヨシノ	268							

3 水路と水質

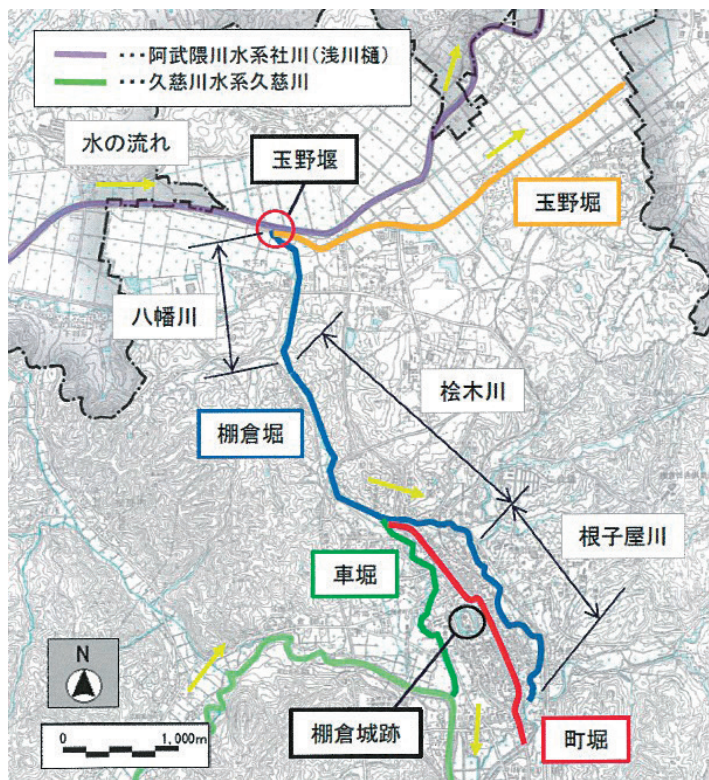
棚倉城の本丸堀に入る水は、棚倉町北部に位置する一級河川阿武隈川の支流である社川から流れ込む。社川の水は玉野堰の三方分水によって久慈川水系へ分水されている。三方分水とは、社川の水を社川流域の三区（福井・玉野・一色地区）に引く「棚倉堀（現在の八幡川～桧木川～根子屋川でかつては逆川堀）」、玉野堰下流の浅川町小貫・太田輪・染・滝輪地区の4集落に引く「浅川樋（現在の社川本川）」の三方に分けていたことからその名がついている。三方分水の棚倉堀から取水している車堀と町堀は、農業用水のほか、市街地の生活用水や防火用水、棚倉城本丸堀の水として利用されている。

本丸堀の水質は生活雑排水が入るために良くない。水生生物としては、コイ、ソウギョ、ブラックバス、ブルーギル、ハクレン、フナ、アメリカザリガニ、アカミミガメ、クサガメ、ウシガエル等が確認されている。外来種が生息している状況である。

棚倉城内堀の水は、前述のとおり社川の水が桧木川を経て町堀に入り、北側内堀の北西角付近から上堀に流入し、追手門側の土橋下に設けられた土管から下堀へと流れて、内堀南西角から外堀跡の側溝へと流れ出ている。

また、本丸平場の集水については、土塁法面下に側溝が巡り、上堀の北側と南側から上堀へと流入している。

社川は白河市南部の栃木県那須郡那須町との境をなす山中を水源とし、西白河郡域東部（旧表郷村、棚倉町北部）を東へ流れ、石川郡浅川町にて流れを北に変え、同郡石川町にて支流の今出川と合流したのちに西白河郡矢吹町との境界をなす阿武隈川へ注ぐ。最上流部は白河市であることから生活排水の流入により水質が悪化している。



玉野堰の三方分水の水路図



社川



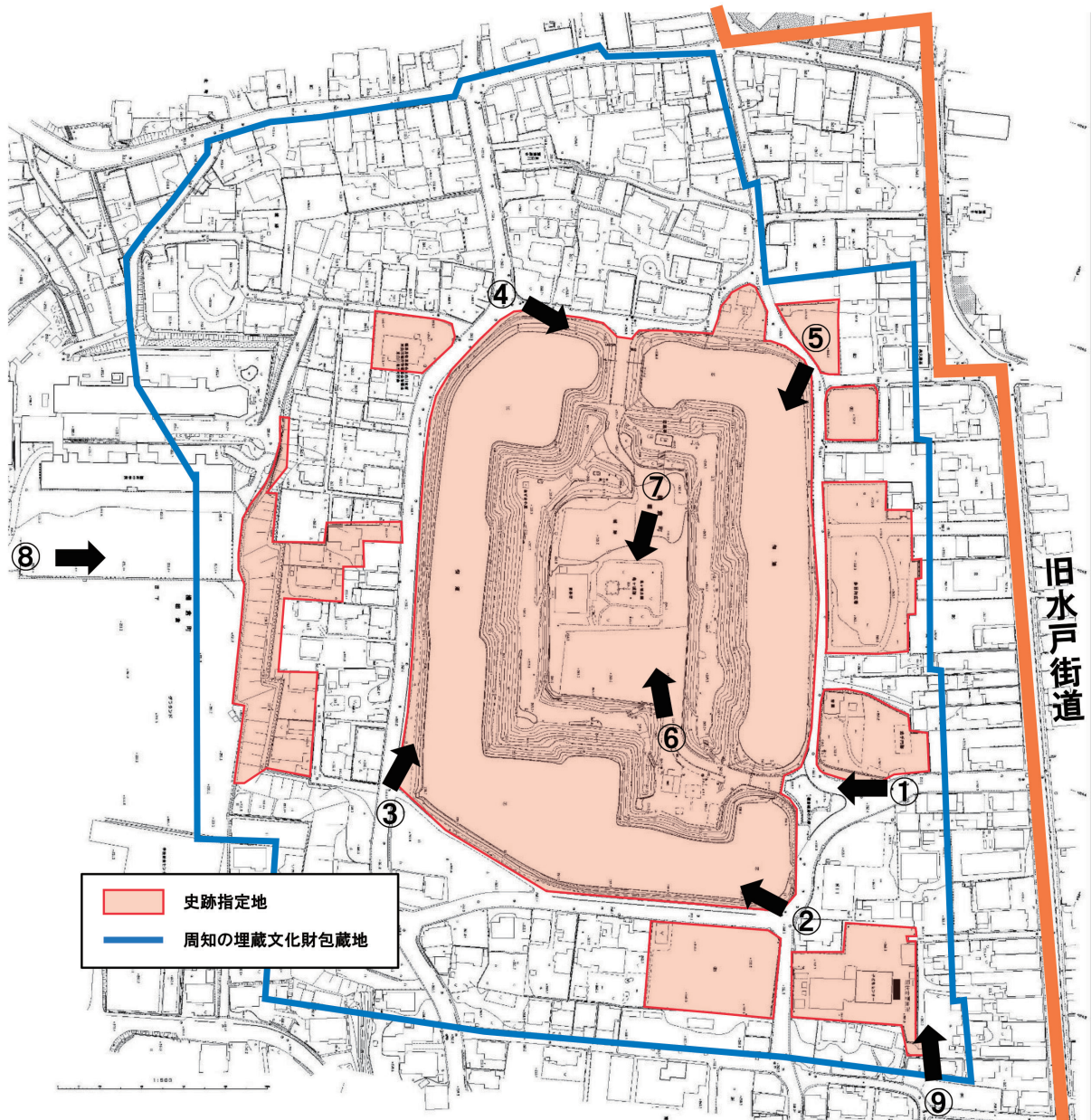
本丸堀に生息する鯉



第 38 図 集排水経路図

4 史跡地外部からの景観

史跡地の景観を以下に示す。史跡の周囲は本丸の周囲を町道が巡り、公共施設や住宅地、駐車場が点在している。周囲から見た本丸は既存木に覆われ緑豊かな公園の景観となっており、棚倉城跡の存在が分かりにくい。



第 39 図 史跡地外部からの景観写真撮影位置図



写真①



写真②



写真③



写真④



写真⑤



写真⑥



写真⑦



写真⑨

棚倉中学校グラウンドから棚倉城跡二ノ丸西面石垣の全体を眺望することができるが、学校敷地内であり、見学のために自由に入出入りすることはできない。また、石垣についての解説板の設置、駐車場の確保、定期的な除草が課題となる。



写真⑧



国道 118・国道 289 号線からの眺望

5 史跡地の状況

史跡内にある工作物については、工作物位置図及び工作物一覧表のとおりである。設置目的や設置団体、利用状況について不明なものも多い。以下に曲輪ごとの状況を述べる。

(1) 本丸

本丸は、残存する本丸土塁、地下遺構、外周の内堀から構成されている。

本丸内部は、正方形を呈した平場になっており、砂及び碎石が敷かれている。本丸平場には、案内板や解説板、角柱、街路灯（防犯灯）等があり、平場の中央部には、旧棚倉町中央公民館の庭園、珪化木、車止めの柵が残り、北側の土橋から車の進入が可能な状況になっている。また、平場の四周には排水施設が設けられ、雨水は内堀に流れる構造になっている。

本丸平場を囲む土塁の法面には既存木が茂り、城郭の景観を阻害している。近年は大規模な風水害があり、今後倒木による土塁の損傷が懸念されている。

また、本丸土塁上には、公園として利用されてきた経過の中で、記念植樹されたサクラ、休憩用の四阿、記念碑・旗柱、板碑、野外テーブル、灯籠、ベンチなどが設置されている。設置された経過や設置者が不明なものもある。南枳形虎口には、公園の便益施設としてのトイレや遊具が整備されている。内堀には、土塁の土留め用の木柵が設けられている。棚倉町防災計画に基づいて、本丸が指定緊急避難場所になっている。以下に主な工作物を解説する。

ア 案内板・解説板・角柱

公園利用のための案内板が2基、棚倉城の解説板1基、戊辰戦争の解説板が1基、建物跡を表示した木製角柱が2基ある。それぞれ、設置者が個々の目的で設置したもので、形状が統一されておらず、景観に配慮していない。また、棚倉城跡の本質的な価値を解説する解説板ではない。

イ ベンチ

散策者用のベンチが、土橋、土塁、帯曲輪に設置されている。土橋に木製ベンチ1基、土塁に石製ベンチ、テラスに木製ベンチがある。公園管理担当で設置したものであるが、設置年代も不明であり老朽化している状況にある。近年では利用者が少ない状況である。

ウ 石積み

公園として利用されていく過程で積まれた石積みが本丸内に6箇所ある。本丸南側土橋の石積みは車が通れるように土橋を拡幅する過程で積まれたものである。本丸枳形土塁の南側石積みは、昭和30年（1955）代に一部が撤去された枳形土塁の土留めとして積まれたものである。本丸土塁南西石積みは、本丸平場から本丸土塁に登るための石段の石積みである。本丸土塁北西の石積みは、本丸平場を拡張する目的で本丸北側の枳形土塁を削平した際に土留めとして積んだもの

のである。本丸北二門脇石積みは、本丸土塁を削平した後に積んだもので、以前は公衆トイレが設置されていた。公衆トイレ撤去時には基礎部分は撤去していない。本丸土塁南西の石積みは土塁の崩落防止のために積まれたものである。

エ 街路灯・防犯灯・電柱

夜間における利用者及び歩行者の安全確保のために設置されており、本丸内には、街路灯 16 基、電柱 17 基が設置されている。形状は様々で景観に配慮したものではない。

オ 階段

本丸土塁に登るための階段が 2 箇所設置されている。本丸土塁北西に設けられた階段は「棚倉町合併記念碑」に向かうための石段である。本丸土塁北東の階段は、「忠魂碑」に向かうための石段である。本丸土塁南東の階段は、かつて本丸土塁上に設けられていた鎮護神社に登るための石段である。本丸南枳形石段は、枳形土塁に設けられた石段で本丸土塁へ向かうための石段である。これらの石段は、いずれもの戊辰戦争以後に設けられたものである。

カ 本丸南枳形遊具

公園利用者の便益施設として昭和 40 年(1965)代に整備され、更新されてきた。

キ 護岸用木杭

本丸土塁の護岸のために本丸堀に設けられた木杭である。江戸時代の絵図を見ると本丸土塁の土留めは石積みにより行われていたようであるが、現在は木杭によって土留めされている。土留めの木杭は、老朽化による更新が必要である。これまでの更新に際して、考古学的な調査や、木杭が適当なのか、等の検討は行われていない。

ク 本丸平場排水施設

本丸平場の排水用に設けられた U 字溝で、本丸堀に流れる構造になっている。設置に際して事前の発掘調査は行われていない。

ケ 記念碑・旗柱

本丸土塁上には以下の記念碑が設けられている。いずれも設置に際しての事前の発掘調査は実施されていない。

- ・ 記念植樹碑

本丸土塁上にサクラの記念植樹を行った際に設置された木柱 3 基である。

- ・ 講和記念旗柱

講和条約を記念して建てられた旗柱である。

- ・ 棚倉町合併記念碑

昭和 30 年(1955) 1 月 1 日に、(旧) 棚倉町、社川村、高野村、近津山岡組合村が合併し、棚倉町が発足したことを記念して設置されたものである。設置に際しての事前の発掘調査は実施されていない。

- ・畑氏終焉の地碑

昭和 37 年（1962）5 月 10 日に棚倉町忠霊塔の除幕式に臨み祭文を読み上げた後に亡くなった畑俊六の記念碑で、昭和 38 年（1963）5 月 10 日に建立されたものである。

- ・忠魂碑 1

昭和 37 年（1962）に設置された第二次世界大戦時における棚倉町出身者の戦没者慰霊碑である。

- ・忠魂碑 2

明治 43 年（1910）に設置された日露戦争時における東白川郡出身者の戦没者慰霊碑である。

- ・東白農商創建碑

旧東白川農商高等学校（現修明高等学校）の前身である農蚕学校が棚倉城本丸跡に建てられていたことから創立 75 年を記念して昭和 58 年（1983）に同窓会により建てられたものである。

コ 板碑

本丸土塁上に、中世の供養塔である板碑、「棚倉城跡供養塔」が 2 基ある。1 基は、種字が「バク（釈迦如来）」、高和 104cm、幅 42cm、もう 1 基は、種字が「キリーク（阿弥陀如来）」、高さ 133cm、幅 61cm である。『東白川沿革私考』（明治 30 年（1897 年）編纂）の記載によれば、この 2 基の板碑は棚倉城築城以前の近津明神（馬場都々古別神社）の遺物であり、本丸平場南西隅にあったものを、移設したとしている。現在、基礎部分はコンクリートによって固められた状態で建てられている。

サ 通路・小径

本丸土塁に登るための通路である。本丸土塁上に建てられていた多門櫓へ登る通路については、江戸時代の絵図にも描かれているが、現在利用されている通路がそれに当たるのかは不明である。

シ 四阿

本丸土塁上に建てられた休憩用の四阿で、隅櫓跡に設置されている。コンクリート製の椅子とテーブルも併せて設置されている。設置年代は不明であり、設置に際しての事前の発掘調査は実施されていない。

ス 野外テーブル

本丸土塁上の隅櫓跡に設置されている休憩用のコンクリート製のテーブルとイスである。設置年代は不明であり、事前の発掘調査は実施されていない。

セ 灯籠

- ・鎮護神社灯籠

本丸土塁南東、隅櫓跡に建てられていた鎮護神社の灯籠である。鎮護神社は

最後の棚倉藩主であった阿部家の藩祖である阿部忠秋を祀った神社で、廃城後に本丸平場の南西隅に建てられたものが、本丸土塁に移転した。本丸土塁に移転した時期は不明。鎮護神社は現在、宇迦神社境内に祀られている。

・常夜灯

本丸土塁南西に建てられている灯籠である。常夜灯の文字が刻まれているが、整備時期は不明である。常夜灯までは石段と石積みがある。

ソ 珪化木

本丸平場に建てられていた棚倉町中央公民館の玄関前に設置されていた珪化木である。珪化木とは、ガラスの成分に置き換えられた木の化石である。公民館玄関前に設置される以前は、棚倉小学校の門柱として利用されていたと伝わる。棚倉小学校の講堂解体と運動広場拡張工事に伴い移設されたものであろう。

タ 本丸土塁法面ツツジ群

本丸土塁を削平して植栽されたツツジである。植栽年代は不明である。

チ 水道施設

本丸平場でのイベント時に利用する水道施設として設置された。通常は水抜きされていて利用できない。

ツ テラス及びベンチ

本丸土塁法面のテラスは散策用に利用されている。江戸時代の絵図に描かれているが、利用目的は不明である。幅が狭いために本丸堀に落ちる危険性がある。散策者用のベンチが3基設置されているが、利用者は少ない。

テ 四阿(城跡ポケットパーク)

当町が平成16年(2004)に整備した散策者用の休憩施設である。四阿、ベンチ(木製)、花壇、井戸、舗装通路等の施設が整備されている。下校時の中学生が利用している。

ト 東白川町村会

昭和初期(1927)に税務署として建築された建物で、現在は東白川町村会が事務所として利用している町有建物である。近代の建物としての詳細調査は実施していない。

ナ 庭園施設

本丸平場に建てられていた棚倉町中央公民館の付属の庭園として昭和45年(1970)頃に整備された。庭石、ツツジ、マツ、フジ、フジ棚などからなる。

ニ 公衆トイレ

利用者の便益施設として平成12年度(2000年)に整備された。外観は棚倉城の別名である亀ヶ城の亀に因んだデザインになっている。トイレには、車止め、手洗い場、浸透枳、ベンチ、石垣型壁などの施設から構成されている。トイレ建設に際しては事前の発掘調査を行い、遺構が検出されなかった場所に設置されて

いるが、本丸枳形という史跡の本質的価値を有する場所にある。

(2) ニノ丸

ニノ丸は、追手門跡、出隅、ニノ丸西面などから構成される。

ニノ丸には史跡指定地の外に、公共施設（多目的広場、棚倉町茶室、四阿、棚倉町子どもセンター、東白川町村会建物）や駐車場（南駐車場、北駐車場）、個人住宅がある。また、本丸堀を外周する道路には転落防止用の柵が整備されている。柵はコンクリート製の擬木やステンレス製など、設置箇所によって様々である。また、外堀については宅地や道路、中学校グラウンド敷地等で埋め立てられており、詳細な構造は不明である。

棚倉町防災計画に基づいて、多目的広場が指定緊急避難場所になっている。以下に主な工作物を解説する。

ア 本丸堀柵

本丸堀の周囲には、転落防止のために柵が設置されている。柵はコンクリート製の擬木やステンレス製の柵、フェンスなど設置箇所によって形状は様々である。本丸堀の周囲は生活道路、散策路として利用されている。これまで事前の発掘調査や景観についての検討はされていない。

イ 街路灯・防犯灯・電柱

夜間における利用者及び歩行者の安全確保のために設置されており、ニノ丸の町有地には、街路灯 22 基、電柱 12 基が設置されている。形状は様々で、景観に配慮したものもある。

ウ 棚倉町城跡南駐車場

町が公園利用者のために平成 17 年度（2005）に整備した駐車場である。棚倉城跡見学者が利用できる駐車場として、利用頻度の多い駐車場である。

エ 棚倉町城跡北駐車場

当町が公園利用者のために平成 17 年（2005）に整備した駐車場である。

オ 多目的広場

当町が平成 17 年（2005）に整備した多目的広場である。野外ステージ、四阿、ベンチ（石製）水飲み場、オブジェ（石製）、遊具、車止め、案内板、災害時誘導板等から構成される。遊具のある芝生の広場であることから、親子で利用する町民が多い。多目的広場から本土塁を眺望することが出来るが樹木により遮られている。棚倉城跡についての解説板は設置されていない。

カ 棚倉町茶室

棚倉町茶室は、町指定有形文化財「阿部正備茶室」、休憩棟（土蔵）、給湯施設、解説表示、竹垣等から構成される町有施設である。茶室は、棚倉藩主ゆかりの茶室で、個人所有であったものを平成 23 年（2011）に町が寄付を受けて移築したものである。土蔵は、明治 31 年（1898）に建設された東白川郡役所の付属

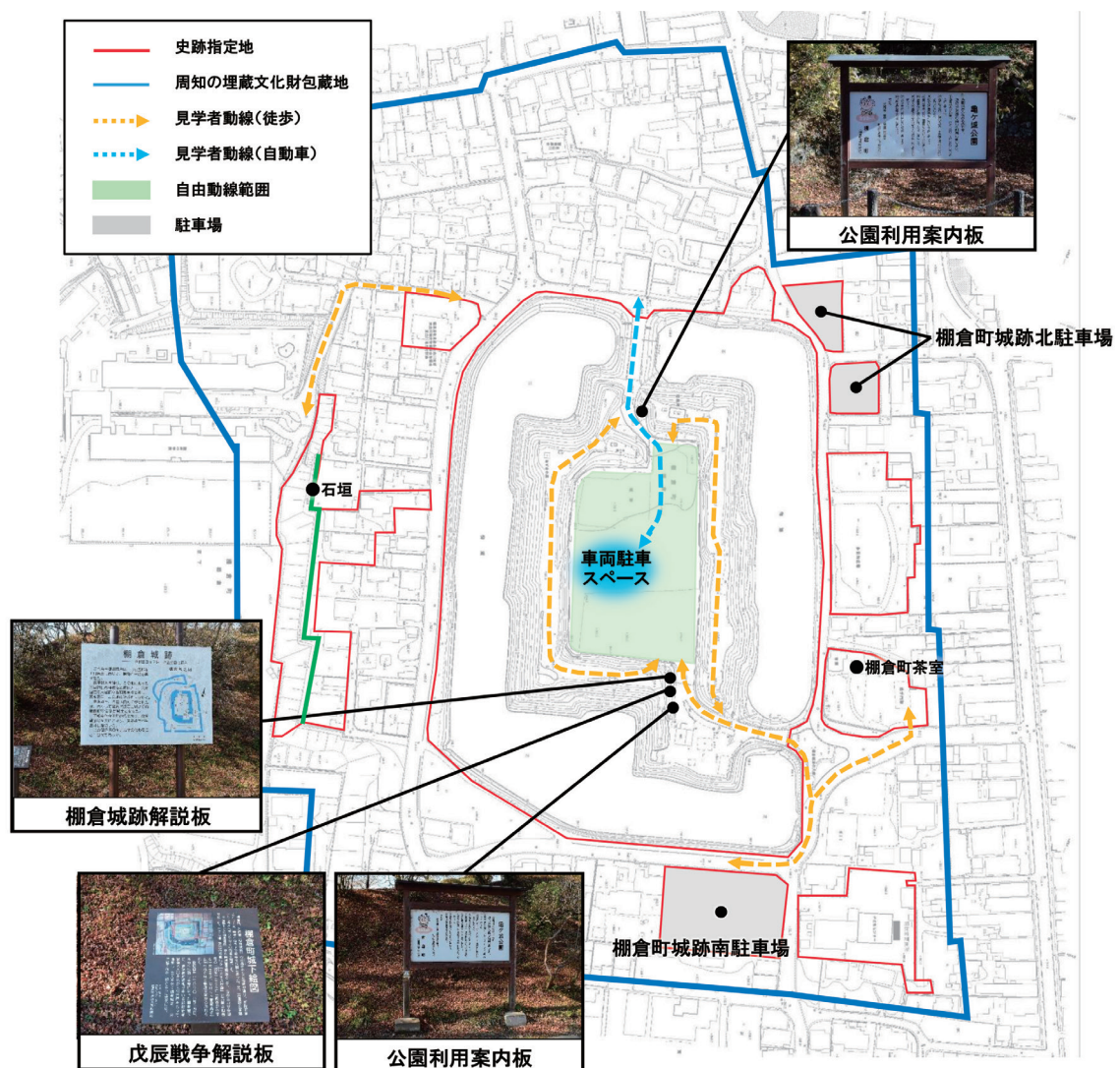
倉庫(土蔵)である。茶室移築に際して給湯、トイレを備えた給湯施設を新築した。土蔵については、旧東白川郡役所庁舎建築（解体）に伴う調査で報告済みである。

キ 棚倉町子どもセンター

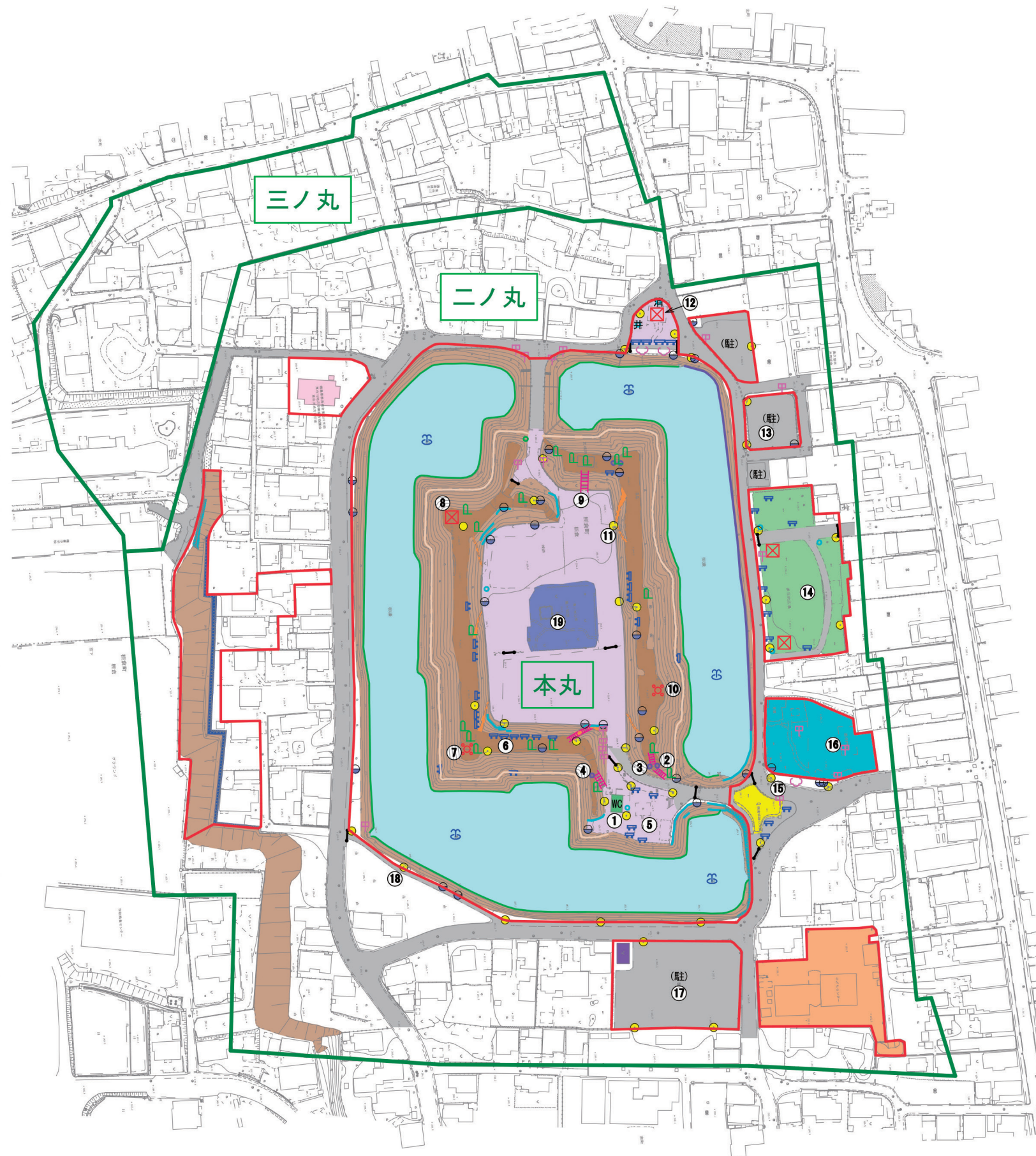
棚倉町子どもセンターの建物は、福島県県南保健所棚倉支所の建物として昭和59年（1984）に建設されたもので、棚倉支所の廃止に伴い平成22年（2010）から町が子どもセンターとして利用している町有施設である。付属施設として、車庫、倉庫、砂場、ゴミ置き場、受水槽、ポンプ室がある。敷地内には二ノ丸出隅の遺構も残るが、建物建設に際して発掘調査は実施されていない。少子化に伴い子どもセンターの利用者は減少傾向にある。

(3) 三ノ丸

三ノ丸はほとんどが民有地である。現況は宅地になっているが、一部が町立棚倉中学校の敷地になっている。棚倉城の遺構も存在しているが、理解されていない。周知に努めて史跡指定に取り組む必要がある。



第40図 来訪者の現状動線



—	史跡指定地
—	周知の埋蔵文化財包蔵地
—	亀ヶ城公園平地
—	大ケヤキ
—	土塁・切岸
—	庭園
—	堀
—	小径
—	町村会建物ほか
—	子どもセンター
—	茶室と追手門跡
—	多目的広場
WC	トイレ
—	消防屯所
(駐)	駐車場
—	舗装路
—	石垣
—	石積み
—	擁壁
—	手洗い場・水飲場・水道
井	井戸
消	消化ホース格納庫
四阿	四阿
—	野外卓
—	噴水
—	記念碑・記念柱等
—	案内・看板等
—	電柱・鉄柱
—	木柱
—	外灯・街灯
—	ベンチ
—	灯籠
—	階段
—	車止め
—	花壇
—	木杭
—	帯曲輪



第 41 図 工作物位置図